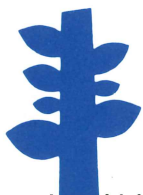


# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス'87夏



- 第139回大学共同セミナー
- 巨大技術と人間
- 第140回大学共同セミナー
- 現代社会と思想の地盤変え — 象徴的なものの社会科学 —
- 昭和61年度 教育プログラム白書 / 業務白書
- 森の番人たち — 夏の大学セミナー・ハウスの野鳥七撰 —



Plain living and high thinking

No.107

# 技術開発と経済制度

東京大学経済学部教授 宇沢 弘文

私は一九六〇年から約一年間パークレーの大学町に住んでいました。当時のキャンパスは実に美しく、大学にも特色があり、さまざまな分野の研究者が活動していました。街では学生が大学生らしい生活を享受し、教授は静かで安全な住宅街に居を構えていました。

昨年二十数年ぶりに当地を訪れ一夏を過ごす機会がありました。その変貌ぶりには驚かされました。大学の中では教師と学生、教師と教師の間関係はぎすぎすしたものになっていましたし、パークレーの町全体は荒廃し、危険で住みにくいものになっていました。

## 経済と人間の乖離

アメリカの貧民階層は一九八一年当時、人口の約一二％といわれておりましたが、レーガン政権下の五年間に一七％くらいまでに増加しています。一九六一年にケネディが大統領になってアポロ計画がスタートして以来、新技術が次々に開発され、実質国民所得は上昇しているはずなのに、人々の生活ははつきりと貧しくなっていることがわかります。私はこれを経済と人間の乖離と呼びます。実はこの乖離が一番顕著なあたりで現われているのが日本ではないでしょうか。

日本では、一九五〇年代中頃から大規模な開発がスタートし、高度経済成長を続けてきました。一九七〇年代初めに、ニクソン・ショック、オイル・ショックを契機として成長もトーンダウンしてきますが、日本は世界のどの国と比べても経済的なパフォーマンスが優れていました。最近では余ったお金がさ

まざまなあたりで投機に振り向けられていますし、ここ一年ほどは円高不況がかなり一般化してきましたが、依然として日本経済全体のパフォーマンスは優れています。

## 貧しい日本人の生活

しかし、翻って私たちの人間としての生活、あるいは人間として生きるという立場から見たときの日本人の生活は大変に貧しいといわざるをえません。生まれてから成長するまでのプロセスの中で、私たち日本人は果たして人間らしい生き方をしているといえるでしょうか。

例えば、今の都会の子供たちをみますと、自由に伸び伸びと友達と遊んだりできる環境が与えられているとはいえません。もちろん教育制度にも大きな原因がありますが、より大きな問題は都市づくりにあるといってもよいでしょう。東京の都市計画は自動車の通行が便利ないようにつくられています。人間が住んでいる場所に巨大な自動車道路をつくってしまう東京の都市づくりは、世界の大都市の中でも極めて特異であり、信じられないことです。日本ではそういう都市が全国至るところにあり、自動車によって人間は押し除けられ、子供は自由に伸び伸びと遊べなくなっています。

このように日本ほど家庭をもって子供を育てるのに住みにくいところはありません。私たちは一生働いても人間らしい住家を獲得することができません。街の中をジョギングしていると、ときどき涙が出そうになることがあります。庭もないような小さな家に住みな

がら、そこには自動車が置かれているのです。自動車がなければ住めないような状況がつくりだされ、そのことによって私たちの経済的・文化的環境が破壊されているのです。つまり、日本の中で生活者として生きていく時、日本は非常に貧しい状況にあるといわざるをえません。

## 技術開発と人間の生活

もちろん、こうした経済と人間の乖離という問題は日本だけの現象ではなく、今や資本主義経済に共通の問題となっています。いま日本では、車を持たなければ生活できないような危険な状況に人々が追いやられています。反面、自動車産業も道路建設関連産業もそれによって栄えているわけです。かつて川上肇は「貧乏物語」の中でラスキンの言葉を引きながら、「経済」というのは富を問題にするが富自体を求めることが目的なのではない。富は人間らしい生活をするための手段として意味があるのだ」と述べています。

日本の経済は大量の失業、不況、経済摩擦などのさまざまな問題を抱えており、内需拡大が叫ばれているわけですが、人々が消費をすればするほど人間が生きる環境は破壊され、ますます私たちは痛めつけられて貧しくなっています。人間の幸福、本当の意味の豊かさという目的のために技術が開発され、使われるということではなく、経済制度の矛盾を反映しながら次々と技術が開発され普及してきます。

アメリカでは、一九六〇年代中頃から先端技術の開発とか軍事・宇宙開発ということよ



③ (左から)シンポジウムの大沢弘之、宇沢弘文、横井俊夫、河宮信郎の諸氏

りも、人間らしい生活を営むことができるような条件をつくるべきだという動きがでてきました。一九七〇年代中頃から、特にレーガン政権になってからこのことが完全に覆えられ、経済の優位が正面に打ち出されるようになりまし。その中で政府は予算規模を縮小し、行政改革を推進し、「小さな政府」をめざしています。行政の効率を高めるために医療・年金・教育など経済とは直接に関係のない部門が切り捨てられ、軍事的支出が増

大していくというパターンができあがり、経済と人間の乖離はますます大きなものになりつつあります。

日本は人間が住めるような土地も少ないし、自然資源にも恵まれていないのですから、私たちはその中で一生懸命働いて、日本経済を支え、人間らしい生き方をするためにその富を使うというかたちに発想を転換していかないかぎり、長期的にみて日本経済のパフォーマンスはうまくいかなくなると思われま。ところが依然として、本四架橋、関西新国際空港、新幹線などにみられるように土木建設を中心とした巨大な開発計画が進められ、あたかもそれが人間の生活をよくするのような幻想をふりまいています。

### 人間らしい生き方を求めて

「内需拡大」ということには、国民ができるだけ浪費し、消費するという意味と、政府が財政支出の規模を拡大し大型の公共事業を行うという二つの意味があります。普通は後者の意味で使われますが、内需拡大の実体はどういうものだったでしょうか。一五年くらい前、下北半島の陸奥小川原にある広大な土地に、鉄鋼や石油化学などの巨大技術の固まりである工業基地をつくるという計画を立て、農民から土地を買い上げました。ところが、そのころすでに生産過剰がはつきり出ていて、結局、民間の企業は一つも工場を移転しなかったのです。政府はそこに石油備蓄基地をつくったわけですが、一番大きな被害を被ったのは土地を追われた農民たちでした。清掃員としてごく少数の農民が石油備蓄基地

で働いていますが、大体の農民は前にも増して貧しく、悲惨な生活を強いられています。

巨大開発をするなら、自動車がなくてすむようなかたちに都市を改造するのも一案ではないでしょうか。例えば、東京の高速道路を撤去して、私たちが自由に歩いたり走ったりすることができ、しかもコミュニケーションが可能であるような規模の都市に改造する。そうすれば、開発計画は、大きな内需刺激にもなり、投資効果も大きなものになります。

これまでの経済学では、市場で取引さされているものを価格で評価して足し合せることによってGNPという指標をつくり、それを中心に理論を組み立ててきました。そうした中で人間らしい生き方と生活の実感などは本質的に数量化できないものであるために、資源配分についての政策的決定をするときに、無視される結果となっています。

犯罪・離婚・家庭崩壊など深刻な問題を抱えたアメリカ社会と比べるとまだ日本には救いがあるような気もしますが、国鉄解体に象徴されるような極端に効率性を重視するマーケット・パフォーマンスの政策をとっていきますと、日本もおそかれはやかれアメリカ型の社会に接近していくことになるでしょう。いずれにしてもこのままでは、子供が生き生きと伸び伸びと成長していける環境が完全に失われてしまうような気がしてなりません。私たちは今こそ人間らしい生き方とはどういうものか、人間らしい生き方をするための環境とはどういうものかを明確にしていかなければならないのではないのでしょうか。

# 第139回 大学共同 セミナー

## 巨大技術と人間

Ⅱ 主題 Ⅱ

### ▼基調講演

I 海洋情報都市——日本の未来を拓く巨大プロジェクト——

電気通信大学電気通信学部教授

寺井精英氏

II 工業技術の本質と限界——部分システムの進歩と全体システムの荒廃——

中京大学教養部助教授

河宮信郎氏

▼ゲスト講演

宇宙開発と日本人

宇宙開発事業団理事長

大沢弘之氏

充当次長

B 巨大技術と有限な地球——システム論と熟学の視座から——

中京大学教養部助教授

河宮信郎氏

C チェルノブイリの警鐘

理化学研究所研究員

樋田 敦氏

D 技術、教育、経済制度

東京大学経済学部教授

宇沢弘文氏

▼運営委員

一橋大学経済学部助教授

室田 武氏

学習院大学理学部教授

江沢 洋氏

一橋大学経済学部助教授

室田 武氏

青山学院大学経済学部教授

坂本百大氏

▼参加者42名(うち女子10名)

東京(8)、筑波(5)、慶応義塾・早稲田(各3)、東京理科・法政・学習院(各2)、国際基督教・東京電機・東京都立・横浜国立・駒沢・埼玉・青山学院・電気通信・日本・明治・東京経済(各1)、その他(6)、以上18校。

◆

チェルノブイリ原発事故、日航ジャンボ機墜落事故、チャレンジャー爆発事故

新世代コンピュータ技術開発機構研

ユータ技術

複雑さへの挑戦としてのコンピ

ユータ技術

新世代コンピュータ技術開発機構研

ユータ技術

新世代コンピュータ技術開発機構研

ユータ技術

期	日
'87. 3. 13~15	

など最先端技術のもたらす巨大事故は、現代の巨大科学技術文明がターニング・ポイントにさしかかっていることを暗示している。巨大技術の可能性と限界、そしてそのあるべき姿をめぐって具体的事例に即しながら議論することが今回のセミナーの主旨である。

巨大技術の評価をめぐって推進派と反対派が拮抗している状況の中で、バランスのとれた人選と運営のために江沢洋・室田武・坂本百大の三氏には多大なご尽力をいただいたことをここに記し、改めて感謝の意を表したい。

◇

第二日の午前中に行われたシンポジウムIでは、巨大技術の是非をめぐって両者の意見がぶつかりあった。

まず樋田氏は、「原発はもはや科学技術ではない」と断言する。原発が科学技術であるならば、▲事故→設計変更→技術開発▼というプロセスを持っていないならばならないが、「原子炉本体には放射能漏れの危険性があるために技術改良ができない」とつまり「チェルノブイリのような事故があってもそれを技術改良に結び付けることができない」欠陥技術であるという。さらに氏は「ある巨大技術だけを取り出してその是非を論じても答えはでない。技術の集積としての『巨大技術文明』のどこに問題があるのかという観点から巨大技術を考えない限り、どんな新技術を開発しても本当の意味での問題解決にはならない」と発言する。

次に、外見的には小さいが複雑な内部システムを持つコンピュータについて、横井氏は「トランジスタ技術は数百年に一度でしか攻められないのよ技術で、攻めれば攻めれば改良が進む」将来性のある巨大技術だが、「ソフトが巨大になりすぎてバグが完全に取れない」という難問を抱えていると現状を報告す

「海洋情報都市」と「工業技術の本質と限界」と題する二つの基調講演は、巨大技術に対する対照的な立場の見解を示すものであった。

冒頭、寺井氏は「海洋に五キロ四方の広さと四層のデッキによって区切られた総重量一億トンの巨大な鋼製都市を先端技術の集約によつて建設し、地価高騰・過密などで悩む東京の都市問題を一挙に解決し、さらには内需拡大と次世代技術のインキュベータとしても多に貢献できる」と巨大プロジェクト推進の必要性を強調する。

これに対して、河宮氏はそもそも「技術とは物質やエネルギーの形態を交換するものにすぎないのであり、技術発展は無から有を生じさせるような性質のものではない。核融合や太陽エネルギーなどどんなに優れた新技術を開発したとしても

もその利用と廃棄の過程でエントロピーは増大せざるをえないのであり、高エントロピー資源の大量利用と環境保全とを両立させることはできない」と巨大技術の限界を熟学的視角から指摘した。

◇

第二日の午前中に行われたシンポジウムIでは、巨大技術の是非をめぐって両者の意見がぶつかりあった。

まず樋田氏は、「原発はもはや科学技術ではない」と断言する。原発が科学技術であるならば、▲事故→設計変更→技術開発▼というプロセスを持っていないならばならないが、「原子炉本体には放射能漏れの危険性があるために技術改良ができない」とつまり「チェルノブイリのような事故があってもそれを技術改良に結び付けることができない」欠陥技術であるという。さらに氏は「ある巨大技術だけを取り出してその是非を論じても答えはでない。技術の集積としての『巨大技術文明』のどこに問題があるのかという観点から巨大技術を考えない限り、どんな新技術を開発しても本当の意味での問題解決にはならない」と発言する。

次に、外見的には小さいが複雑な内部システムを持つコンピュータについて、横井氏は「トランジスタ技術は数百年に一度でしか攻められないのよ技術で、攻めれば攻めれば改良が進む」将来性のある巨大技術だが、「ソフトが巨大になりすぎてバグが完全に取れない」という難問を抱えていると現状を報告す

る。

これに対して参加者から、コンピュータ技術の進歩に危惧の念を覚えるという意見が出された。横井氏は「第五世代コンピュータでも知能の限られた機能を正確に、高速に、大量に処理してくれる」機械にすぎず、まだ人間の知能とは比較にならないという。しかし「人間の頭脳もやがては機械化できる、と信じつつ技術改良に努めている」と技術者の心境を語った。

また「莫大なエネルギーと資金がかかる海洋情報都市は実現の可能性が薄いのではないか」という疑問に対して、寺井氏は「必要は発明の母」なのであり、たとえ実施する前に多くの問題があったとしても推進していくうちにいくらかでも新しいアイデアは出てくるものであり、はじめから絶対に不可能であると断言すべきではない」と、人間の知恵の可能性を強調された。

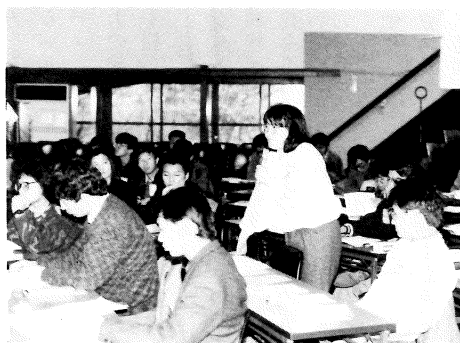
◇ ゲスト講演「宇宙開発と日本人」では大沢氏が、現代の巨大技術の典型である宇宙開発の重要性について指摘する。「チャレンジャー事故は不注意が重なって起きたシステム事故であり、あとから考えると慎重に処理しさえすれば完全に防げた事故である」資源のない日本の産業技術の将来を考えると、安全性などさまざまな問題はあるが、新しい産業を育成するためにも巨大技術は必要だ。ゲスト講演に引き続き行われたシン

ポジウムIIでは、巨大技術と人間らしい生き方をめぐって議論が展開した。

宇沢氏の問題提起(2・3頁に別掲)に対して、「高速道路をつぶせというのは非現実的ではないか」「技術の進歩の否定は伝統回帰の考え方ではないか」との反論が出された。宇沢氏はもちろんそれは「象徴的な意味」であることを前置きしたうえで、「市民の基本的人権を犯してまで自動車道路をつくる必要はない」のだが、「技術の採用は、資本主義的の制度の中では儲かるかどうかという経済の論理によって決まる。人間らしい生き方に役立つような技術の採用が行われるような制度的基準のないところに大きな問題がある」と力説した。

◇ 最終日は各セッションでの議論の報告と総括の討論が行われた。「巨大技術と人間の幸福のために生かすにはどうしたらよいか」「生態系を維持したままでいかなる技術を持つことが可能か」「巨大技術に携わる技術者、専門家だけにまかせておくのではなく、情報公開、科学ジャーナリズムによっていかに市民が意思決定に参加するか」「地域に密着した技術の可能性はないか」「自動車が無くて済むような都市計画はできないか」など多様な論点が提起され、白熱した討論が展開した。

巨大技術はこれまでに何をもたらし、これから何をもたらすのだろうか。現代の巨大技術は、もはや「中立的な道具」



巨大技術を人間の幸福のために生かすのはどうしたらよいか——シンポジウム(講堂)

などではなく「国家技術」(室田氏)として機能し、多数決原理によって支えられた「経済の論理」によって動いているといえるだろう。本来技術は人間を幸福にするための手段であったはずだが、巨大事故や環境破壊の実状を見ると巨大技術を手ばなしで推進することはできない。ただ「巨大技術を批判することだけに終始するのではなく、カウンターストロジェクトの可能性と新しいライフスタイルをいかに創造していくかが課題となるだろう」(河宮氏)し、「技術と社会の関わり方をあらゆる学問を動員して検討すること」(横井氏)が今後ますます必要となってくるだろう。

なお、本セミナーの全容は朝倉書店から単行本として出版される予定になっているので、詳細はそれをご覧いただきたい。

### 参加学生の感想から 巨大技術と思いやり

学哲院大学文学部4年 小山 真弓

自然と私達が互いに肌で意識しあえる多摩の丘は、ある時は鳥の声を満喫させ私達を喜ばせますが、同時に、雨は足元を悪くし、私達に不便を感じさせもします。このような環境の中で、「巨大技術と人間」というテーマについて考えるのは非常に意義深かったと思います。何故ならば、この状況が、便利さと不便さ、一体誰にとっての技術か、技術と自然環境は共存しうるのか、といった重要な問題点を討論の場に与えてくれたからです。

都会の生活の中で便利さを追求し過ぎてきた私達は、必要以上に便利さを追求し過ぎて、むしろそれに伴う弊害の大きさを見過してしまっているのではないのでしょうか。今現在、私達が恩恵を受けている技術も、他の誰かに、また自分自身の他の側面において、マイナスになっていることがあるということも忘れてはいないのでしょうか。自然を、ただ単に技術の対極に置くのではなく、自然からも、そして技術からも切り離せない人間自身の位置を常に問うていくことが、これからは非常に重要です。また責任の重さも相手が「巨大技術」であれば、格別に重くなっていることを自覚しなければならぬと思います。最も重要な点は、どれだけ自分以外のもの、のことを考えられるかという思いやりにあると思います。その意味で、技術を作り出す人間の側に、一番思いやりの心、感性、研ぎ澄まされた感覚が要求されるということこそをセミナーで確認し、改めてこの問題の本質的な難しさを感じ知らされました。

しかし、自分達の身近な現代的テーマについて熟く、深い討論を積み重ねていくことによって、古い文献を紐解き、解釈を与えていくことだけを学問とするのではなく、このように新たなスタイルにも十分に学問的価値を置くことが来ているのではないかと、という思いを非常に強くしました。他大学生との交流、幅広い学部間の学際的アプローチ、教授と学生のままの接触、そしてどんなに難しくても自分達の問題としてとらえていくという意識、意

(6頁4段目につづく)

## ▼全体講義

永劫回帰とフェティシズム

中央大学文学部教授 丸山圭三郎氏

## ▼セクシオン演習

A △新しい歴史学√の可能性——歴史学と社会科学——

東京経済大学経済学部助教

福井憲彦氏

B 消費社会の象徴パワーと文化資本

信州大学教養部助教 山本哲士氏

C 愛の歴史とル・サンボリック

東京都立大学人文学部助教

## Ⅱ 主題Ⅱ

## 現代社会と思想の地盤変え

## 象徴的なものの社会科学

第140回  
大学合同  
セミナー

西川直子氏

D 政治的無意識と社会的象徴行為

学習院大学文学部助教 大橋洋一氏

## ▼運営委員

信州大学教養部助教 山本哲士氏

東京経済大学経済学部助教

福井憲彦氏

## ▼参加者35名(うち女子14名)

筑波・東京都立(各3)、埼玉・慶応義塾・中央・津田塾・早稲田・神奈川(各2)、千葉・東京・東京外国語・一橋・信州・放送・国際基督教・成城・東京女

子・日本女子・立教(各1)、その他(6)、以上19校。

## ◇

私たちは、だれしも自らの日々の暮らしが自由だと思ひ込んでいるが、もし、そこに現代の「見えない支配」が巧妙に編み込まれているとしたら？ 私たちのプラチック(慣習的行動)の中に、それとは気付かれない形で「象徴権力」の世界が浸透し、私たちの「無垢さ」がそうした現代の権力支配を容認し、支えているとしたら？

期	日
'87. 5. 22	~24

運営委員の山本氏によれば、一九六〇

年代から顕著となってきた現代産業社会の決定的変貌(消費社会化)と相まって、欧米の現代思想は大きな地殻変動を経験した。とりわけ、これまで体制、階級、民族、政策等々、もっぱら「目に見える」ものを対象に論じてきた社会科学は、私たちの日々の営為を構成している「見えない世界、語られえない世界」に新たな光を照射することによって、△知の新しい地盤√を取り出したという。「ここの数年の知的な変動が、軽薄短小の表層で

なく地盤からしつかりと捉えられ、思想・理論の文化生産状況がやつと本格的になった」(山本氏)。「人間、社会、歴史をトータルにとらえるという社会科学の初源の目的」へと立ち戻るためにも、新しい現代思想の到達点から「見えない力の作用」を鮮明に描き出していくこと。以上が、今回のセミナーの課題である。

## ◇

社会科学を「もつと面白く、自由のびのびと構想していく」。開講式に引き続いて、山本氏は、「現代産業社会を批判的に捉えていく」ための視点として、「社会科学の眼」が必要不可欠であることを指摘。「王様の権力のように、かつて権力は目に見えるものであったが、現代では見えない領域で権力の新しい編み込まれている。権力、反権力といった図式では、現代社会の支配や抑圧の在り方を捉えることはできない」とし、ミッシェル・フーコーやビエール・ブルデューの思想を手掛かりとして、「非権力の領域」へとアプローチしていく視角を提示した。

「自由に生活しているようで、実は大変重苦しい社会関係に陥っている」現在の状況を的確に把握するためには、「近代なるもの」の生成プロセスの解明も欠くことはできない。

「民衆の日常的な生活世界」に光を当てた「新しい歴史学」(アナル派)の立場から福井氏は、「歴史認識における△時間√と△空間√といった基本的枠組

欲の深さは、心から熱中して楽しんで勉強することを存分に思い出させてくれました。この場を提供してくださっている大学セミナー・ハウスの存在に感謝するとともに、内外から大学の在り方が問われる良い契機となることを願ってやみません。

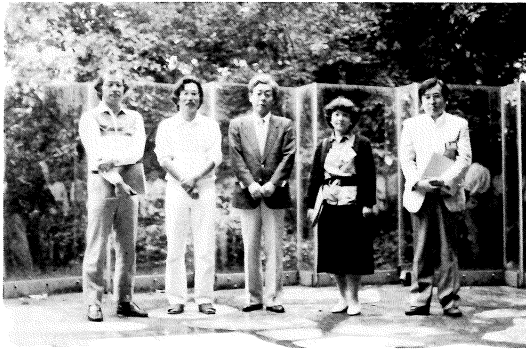
み」に対する見方の組み替えを提唱した。歴史を生きた「普通の人々」の「日常的な思考システム、感性の在り方や知覚の型」√マンタリテ(心性)の領域を生きた生きたと捉え直していくために、「象徴的なもの」や「想像力」に関わる能力の重要性を訴えた。

現代の社会科学が排除してきた「見えない心的なもの」に対し、新たな知の地平を果敢に切り拓いてきたのが、精神分析、言語学、文学批評の分野である。今回のセミナーでは、ジュリア・クリステヴァの「意味生成論」(西川氏)とフレドリック・ジェイムソンの「政治的無意識論」(大橋氏)という知の最前線からの知見を、社会科学の領域へと積極的に切り結んでいくことが企てられた。

言語とは「意識的な主体が統御・操作するもの」と前提してきた言語学、記号論に対して、クリステヴァは、言語活動を「ル・サンボリック(記号象徴態)とル・セミオティック(原記号態)」の二つのレベルから把握し直した。前者の単一論理の意味作用は、「無意識」に根ざす後者の否定的論理によって常に変形、破壊、解体、更新される。彼女は、多数の論理(ポリログ)による終わりなき意味生産が、「記号象徴体系の単一論理

的な権力を多数化し粉砕する」ことを示し、言語活動における「脱権力の領域」へと道を拓いたのである。

意味が、「構造」と「非構造」の間の動的な「交流・対話」の過程から生まれるものであるとすれば、文学作品における「絶対的、超越的な解釈」はその根拠を失う。ジェイムソンはテキストを「立体的に捉え、その中に秘められている本質を取り出す」ことを目指した古い解釈学に対し、文学を「のっぺりとした平面的なもの」として捉え、いわば「上空」から「各々独立しているように見える閉じられた作品を、様々な形で他のものとの関わり合いの中から開き」、「通常は気付けられることのない隠蔽された政治性や社会性」を明るみに引き出そうとした。



左から福井、山本、丸山、西川、大橋の諸氏



二日目の午後は、ソシュールの言語学研究から出発し、言語への深い洞察を通して、独自の哲学的宇宙を構築してきた丸山氏の講義が行われた。テーマに選ばれた「ニーチェの永却帰帰の思想とフェティシズム」は、現在、氏の思想の営みの再先端に位置している課題である。氏はソシュールの「コトバの解体」の手続きを下敷きにしつつ、言葉意識の表層から下降し、「意識の深層に見い出される多数の主体」へと至り着く。「コトバの風景」を描き出す。「ニーチェの内的体験としての永却帰帰は、始まりも終わりもない円環であるが、これは文化には一切の根拠がないという私のフェティシズムに近い」。永却帰帰とは、決して同一なるものの反復ではなく、「形象を絶えずつき崩す運動と、運動を絶えず形象とする力が登場する舞台」であり、生（レーベン）にその度ごとに新しい異なった意味を与える永遠の運動であるという。

二時間以上にわたる濃密な講義の中で、氏は、「実体論と逆転実体論」のアポリアを乗り越えて、「生の多様性や偶然性を直視する」ためには、コトバや文化の「無根拠性という断崖絶壁に立ち続ける以外にない」と繰り返し、無限の「否」をもって徹底的に問い詰めていくことによって見えてくる「生のポリフォニー性」について、熱弁を振った。

最終日の総括集会では、学生代表によ

る演習報告に引き続き、後半は講師と参加者との自由な質疑応答の時間が持たれた。討論の過程では、今回の問題設定の確認やテーマの投げかける様々な問題が改めて検討に付され、現代思想の成果を踏まえた上での「社会科学と人文科学の交流」が実現した。

あくまでも「現実的なものへの社会科学学的なまなざし」を見失わずに、普段から「あたりまえだ」、「そうあるべきだ」と思い込んでいる、その「思い込み」を、象徴の生産、分類、支配のあり方からじ

### 参加学生の感想から

#### ひとつの祝祭

—— 共有し学び合うことの喜び ——

埼玉大学社会文化研究科修士1年 佐竹 保宏

（現代社会と思想の地盤変遷」というテーマは十分魅力的だったが、「大学共同セミナー」に申し込むには、相当の決心を必要とした。

見知らぬ人のなかにいきなり飛び込むのはためらわれたし（どちらかといえは僕はシャイな性格である）、セミナー・ハウスの案内には「勉強と修練」なんて文字さえ見受けられないので（どちらかといえは僕は真面目な人間だが、それ以上に「遊び」やお酒が好きだったりする）、正直、不安だった。さらに悪いことに、八王子は丘陵地ときている（というのも、僕は「車いす」を使用する「障害者」である）。そんなわけで、セミナーへの参加は、かなりの大冒険だったわけだ。

だが現在、その冒険での出来事の一つひとつが、いきいきとした色彩とともに、僕を刺激しつづけていき。かつて不安だったことが、現実のなかで、喜びに変わる瞬間——まさに

つくりと捉え直していく。私たちの日々のブラチツクの持つこうした「文化的根拠の深みの考察」によってこそ、山本氏の言う「よそ事の学問ではない、わが事の学問」も可能となるに違いない。三日目の自由討論に至って、「ようやく問題の糸口が掴めた」（山本氏）といった印象であったが、「学びたいと欲する者」だけが集まる「コンピビアルな環境」で、現代産業社会という「おそろしく難解なテキストの解説」に挑戦した35名の参加者の健闘を称えたい。

ひとつの祝祭として—— 様々な異なる問題意識をもった個性が、ともに何かを共有し学びあうことがもたらす充溢。そこでは、参加者の全員が、セッションで提起された高度な「理論」に多少面くらいつながら、深夜までわたる討論をとおして、それぞれの差異や価値をまぶしく交錯させていた。

もちろん、こうした相互の輝きに満ちたセミナー・ハウスの三日間が、あまりにも短く圧縮されすぎたのも事実だ。最終日には充実感のなかに一抹の物足りなさも同居している。その意味で、このセミナーは、ひとつの導入であったといえるかもしれない。そして、ここで得た刺激の総和が、いつか、様々ななかで未来へと解き放されていくことになるだろう。僕はその可能性を、セミナーでの出会いをつづじて確信している。僕自身の「元氣」も、また俄然湧いてきたようだ。（現代社会と思想の地盤変遷）は、だからここに出発点として、参加者一人ひとりのなかで、さっさと始まっているにちがいない。最後に、真夜中まで僕たちにつきあってくれた（御指導してくださった諸先生方、急な坂道や階段にもげない無謀な「車いす」の存在を、笑顔で受け入れてくれた心やさしい初対面の友人たち、そして、こうした「場所」を提供してくださった大学セミナー・ハウスの関係者の方々に、この場を借りて、あらためて感謝の言葉を述べさせていただきます。

# 昭和61年度教育プログラム白書

⑧

〈表1〉 昭和61年度教育プログラム開催状況

▶大学共同セミナー

回数	期間	主 題	指 導 教 授	参加人員
No.136 (1)	昭和61年 5月23～25日	文学と風土 ——日本文学の特殊性と 国際性——	芳賀 徹、大江健三郎、野中 涼、 大久保喬樹、田代慶一郎、仙北谷晃一、 (鈴木和子)、(川端香男里)	35名 (13校)
No.137 (2)	11月14～16日	生命倫理を考える	古川俊之、村松正実、加藤尚武、 新美育文、合田周平、*坂本百大	37名 (13校)
No.138 (3)	12月5～7日	平和と軍縮を求めて ——人類が共に生きる 条件——	豊田利幸、中島正樹、高柳先男、 下斗米伸夫、大西 仁、最上敏樹、 *鴨 武彦	84名 (25校)
No.139 (4)	昭和62年 3月13～15日	巨大技術と人間	寺井精英、河宮信郎、大沢弘之、 横井俊夫、槌田 敦、宇沢弘文、 *室田 武、(江沢 洋)、(坂本百大)	42名 (18校)

▶大学院共同セミナー

No.7	7月4～6日	人間性と犯罪 ——総合犯罪人間学を めざして——	別役 実、岡 宏子、福島 章、 *小田 晋、中里至正、加藤久雄	33名 (13校)
------	--------	--------------------------------	------------------------------------	--------------

▶大学合同セミナー

No.9	12月12～14日	東京の都市景観 ——その2——	*石黒哲郎、*戸沼幸市、陣内秀信、 後藤春彦、山田 学、鳥越けい子	70名 (6校)
------	-----------	--------------------	--------------------------------------	-------------

▶国際学生セミナー

No.13	10月24～26日	<開かれた>日本・総点検 ——<開かれた>とは 何か——	大島英樹、*M・スティール、 島野卓爾、C・マッケンジー、 江淵一公、S・トラウィーク、 小高章子、L・ハケット、古森義久、 (宇佐美 滋)、(庄野克房)、(小野沢 正喜)、(溝田 勉)	64名 (22校)
-------	-----------	------------------------------------	--	--------------

▶大学教員懇談会

No.23	10月4～5日	大学教育の充実と個性化 ——臨教審第二次答申を めぐって——	飯島宗一、慶伊富長、井門富二夫、 伊東光晴、大崎 仁、佐藤禎一、 (蛭山道雄)、(岩波一寛)、(杉山 恭) (石川孝夫)	57名 (27校)
-------	---------	--------------------------------------	---	--------------

\*印は運営委員を兼ねた指導教授。( )は運営委員。

昭和61年度は、表1に示すとおり、前年度に準じ合計8回のプログラムを実施した。この紙面を借りて、これらの企画

に当たられた共同セミナー委員、国際プログラム委員、大学教員懇談会企画委員および各プログラムの指導教授諸氏のご協力に改めて謝意を表したい。表2は学生対象のプログラム計7回の参加状況である。参加者総数は前年度よりさらに一名減少し、一般教育の理念に根ざしたプログラムをいかに“現代化”するかは、引き続き最大の課題である。

〈表2〉 昭和61年度教育プログラム参加状況

(計7回：第136～139回大学共同セミナー、第7回大学院共同セミナー、第9回大学合同セミナー、第13回国際学生セミナー)

【①大学別参加者数】

大学区分	男	女	合計	大学区分	男	女	合計	大学区分	男	女	合計
筑波	20	7	27	青山学院	2	4	6	法政	11(6)	4(1)	15(7)
東 京	1		1	山 習	1	9	10	武 蔵		4	4
東 京	33(11)	2	35(11)	学 塾	13	6	19	工 業		1	1
東 京	3	7	10	慶 応	5	2	7	治 学	2	2	4
東 京	3		3	国 際	3		3	院 教	3	6	9
東 京	1(1)	2(2)	3(3)	基 督	25(25)		25(25)	田 教	4(1)	2	6(1)
電 気	2	2	4	芝 浦	1	2	3	立 早	46(19)	14(4)	60(23)
通 信	1	1	2	工 業	1	2	3	国 際		1	1
橋 立	2	2	4	成 中	5	1	6	社	1		1
横 浜	4	1	5	津 田	5	7	7				
				帝 京	2		2	私 立 小 計 (30校)	153(51)	88(5)	241(56)
国 立 小 計 (10校)	67(12)	24(2)	91(14)	東 京	1	2	3	産 業 能 率 短 期 成	1	1	2
				京 経	2		2				
東 京 都 立	2		2	京 女	1	5	6	短 期 小 計 (2校)	1	1	2
横 浜 市 立		2	2	東 京	6		6	そ の 他	16	11	27
				東 京	2	1	3				
公 立 小 計 (2校)	2	2	4	日 本	2		2	総 合 計 (44校)	239(63)	126(7)	365(70)
				本 女	1	8	9				
東 京 国 際	3	1	4								
独 協	8	6	14								

( )内は内数で大学合同セミナー参加者。総数365名のうち留学生は6名。



# 昭和61年度業務白書

なお、開館以来  
(二一年九ヵ月間)  
の宿泊利用者数は  
延べ九万五、三  
七五人、グルー  
プ

## ●年間宿泊利用者五万四、一五八人

昭和61年度の宿泊利用者数は表1に示すとおり、延べ五万四、一五八人(月平均四、五二三人)、グループ数は一、一〇七(同九二)であった。対前年度比一、〇〇四人増で、54年度以来、八年連続五万人台を維持した。

## ●グループ別の利用状況

利用者を宿泊延人数で大別すると図1のようになる。「会員校」(協力会員校は進会員校を含め六四校)は全体の五四%であるが、「大学連合」(二〇%)にも会員校を中心とする連合集會が含まれてい

〈表1〉 利用者別宿泊人数・ゼミ回数 ( )内は前年度数

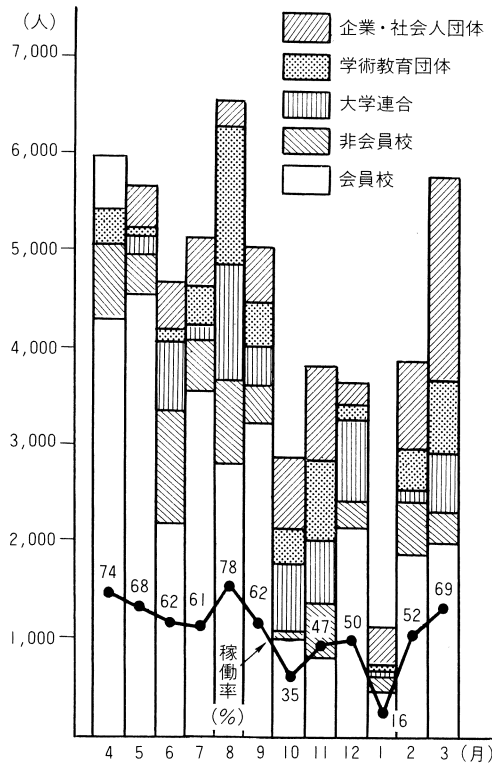
	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均実人数
会員校	593 (613)	53.6	28,980(27,999)	53.5	32 (29)
非会員校	138 (124)	12.5	6,026( 5,999)	11.1	26 (33)
大学連合	48 ( 42)	4.3	5,585( 3,861)	10.3	48 (42)
学会・教育団体	112 ( 88)	10.1	5,408( 6,238)	10.0	30 (33)
社会人団体	216 (252)	19.5	8,159( 9,057)	15.1	23 (23)
合計	1,107(1,119)	100	54,158(53,154)	100	30 (29)

〈表2〉 会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	中央大学	52	1	中央大学	2,107
2	東京都立大学	45	2	早稲田大学	1,782
2	早稲田大学	45	3	慶応義塾大学	1,317
4	東京大学	32	4	東京都立大学	1,123
5	慶応義塾大学	31	5	東京薬科大学	1,014
6	東京学芸大学	23	6	東京大学	970
7	東京理科大学	22	7	立教大学	922
8	明治大学	21	7	津田塾大学	922
8	法政大学	21	9	東京電機大学	892
10	青山学院大学	20	10	東京学芸大学	843

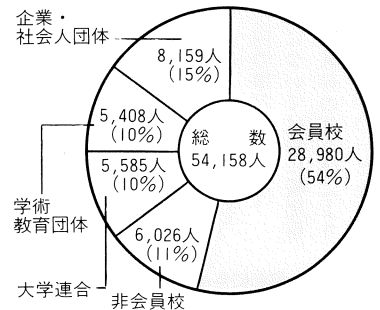
(注) 中央大学の通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

〈図2〉 月別・利用グループ別宿泊延人数と稼働率



●年間の稼働率五六・五%  
年間(稼働日数三五五日)の平均稼働率は五六・五%で、前年度(二五・六%)

〈図1〉 利用グループ別宿泊延人数



【②学年別参加者数】(8頁表2)つづき

区分	男	女	計	比率(%)
1	21	14	35	9.6
2	14	30	44	12.0
3	56	33	89	24.5
4	78	19	97	26.5
大学院	49	18	67	18.4
その他	21	12	33	9.0
合計	239	126	365	100.0

を上回った。図2に示すとおり、ハウスの利用状況は概して年度の後半が低く、特に学年末試験をひかえた1月は、本年度も二〇%を下回った。週末を除いた平日の促進をはかり、全体としての稼働率を高めることが課題である。

第63回理事会・第44回評議員会

'87年3月16日／銀行倶楽部（丸の内）

〔出席者〕

△理事▽中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、天城勲、小山五郎、立野晴夫  
 △評議員▽小川芳男、岡宏子、川原栄峰、加納六郎、安田元久、川井健、久留都茂子、委任状による者理事一三名、評議員七二名  
 ◇（敬称略）

理事会、評議員会は、中川理事長が議長となり議事に入る。立野専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち各案件を承認可決した。  
 △評議員人事案について  
 学長交代等により、大妻女子大学長中川秀恭、一橋大学長川井健、お茶の水女子大学長河野重男、東芝社長渡里新一郎、日立製作所社長三田勝茂の各氏の新任。藤巻正生、佐波正一、駒井健一郎の各氏の退任。  
 △役員人事案について  
 前一橋大学種瀬茂学長の死亡により、川井健学長を理事に選任。

▽昭和62年度事業計画案について  
 △昭和62年度収支予算案について  
 収支予算案については別掲の予算書のとおりである。なお予算編成に当たっては、会員校会費、利用料金等とも以前年

度に引き続き据え置きとし、事業収入の面で利用率56%を目標に増収をはかることとし、利用者延人数は61年度実績から五万四、〇〇〇人を見込んだ。

事業計画については、新国際館の建設に備えて既存の施設設備の改善をはかる。①本館全階の冷房化工事、②長期セミナー館の内外壁補修、③ユニット宿舍群洗面所等の改修工事、④開館20周年記念募金の目標達成と昭和63年度オープンを目標にインターナショナルロッジ（国際館）の建設に着手する。

▽開館20周年記念事業募金について  
 小山募金委員長から、募金目標額を三億五、〇〇〇万円と予定していたが、昨今の経済情勢から樂觀できない見通しなので、当初の計画を変更せざるを得ないのではないかと意見があり、理事長から、自己資金を含み総予算約一億五、〇〇〇万円、収容人員40人、250坪程度の規模に縮小せざるを得ないこと、およびその設計については、創立以来の設計者であるU研究室に委託する契約を結びたい旨提案があり、承認された。

第64回理事会・第45回評議員会

'87年5月29日／銀行倶楽部（丸の内）

〔出席者〕

△理事▽中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、小山五郎（代理清水克彦）

△評議員▽小川芳男、岡宏子、川原栄峰、大東百合子、松田進勇（代理牧野勝則）、柳井久義（代理石黒哲郎）  
 委任状による者理事一四名、評議員六八名  
 ◇（敬称略、順不同）

理事会、評議員会は、中川理事長が議長となり議事に入る。立野専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち各案件を承認可決した。  
 △評議員人事案について  
 学長交代等により、上智大学長土田将雄、千葉商科大学長早川泰正、東京家政

大学長池本洋一、東京都立科学技術大学長渡辺茂の各氏の新任。橋口倫介、番場嘉一郎、津郷友吉の各氏の退任。  
 △協力会員校の加入について  
 東京都立科学技術大学の加入。  
 △昭和61年度事業報告案について  
 △昭和61年度決算案について  
 事業収入は、予算に見込んだ利用者延人数五万四、〇〇〇人に對し五万四、一五八人とやや上回り、二四六万七、〇〇〇円の増収となった。  
 支出については特に暖房用重油、電気料の値下げにより、予定額の約二分の一となり、

当期収支差額約九七〇万円を計上した。詳細は別掲の収支計算書に示すとおりである。

なお監事から、適正に処理されており、特に問題はないとの報告がなされた。

▽開館20周年記念事業募金について  
 募金の進捗状況および見通しについて説明があり、自己資金を含み総予算約一億五、〇〇〇万六、〇〇〇円で、基本構想がまとまり次第、秋頃には着工し来年度には完成したい旨提案があり、承認された。

昭和62年度一般会計収支予算書（62.4.1～63.3.31）

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
基本財産運用収入	121,000	人件費	136,440,000
会員校会費収入	56,300,000	施設管理費	25,532,000
事業収入	163,080,000	その他管理費	21,940,000
施設改修協力金収入	9,700,000	一般事業費	16,873,000
セミナー会費収入	2,960,000	普通セミナー事業費	33,189,000
補助金等収入	9,883,000	学生指導セミナー事業費	10,880,000
寄附金収入	400,000	国際セミナー事業費	3,300,000
雑取収入	7,680,000	固定資産取得支出	8,000,000
特定預金取崩収入	4,230,000	繰入金支出	3,934,000
繰入金	8,934,000	20周年記念事業費	2,170,000
		子備	1,030,000
当期収入合計	263,288,000	当期支出合計	263,288,000
前期繰越収支差額	77,578,000	次期繰越収支差額	77,578,000
合計	340,866,000	合計	340,866,000

国際館建設のための  
開館20周年記念募金第4回報告

(87年5月末日現在)

◎大学  
淑徳大学

個人

申込総額 九三、七一四、〇〇〇円

(うち入金済 九〇、九六四、〇〇〇円)

内訳

財界関係 四一件 八、四九八万円  
大学 三二件 三九六万円  
一般 一八件 六〇五、〇〇〇円  
個人 一三九件 四、一六九、〇〇〇円

●寄付申込者、芳名(申込順)

◎財界関係

株式会社ダイエー殿  
丸紅株式会社殿  
日商岩井株式会社殿  
伊藤忠商事株式会社殿  
住友商事株式会社殿  
関東百貨店協会殿  
日本瓦斯協会殿  
日本建設業団体連合会殿  
国際電信電話株式会社殿  
藤倉電線株式会社殿  
三井不動産株式会社殿  
株式会社東芝殿  
花王株式会社殿  
日本製紙連合会殿  
富士写真フイルム株式会社殿

国際基督教大学教授

川島重成殿

津田塾大学教授

上田明子殿

国際連合駐日代表部

溝田 勉殿

立教大学教授

香原志勢殿

勸学社セミナー・ハウス理事

長・館長

中央鉄道病院

松平文朗殿

東京外国語大学教授

野村茂殿

東海大学教授

鈴木守殿

学習院大学名誉教授

木下是雄殿

東北大学名誉教授

大泉充郎殿

健康管理コンサルタント

岡 惺治殿

上智大学外国語学部教授

川田 侃殿

早稲田大学名誉教授

鈴木佛二殿

東京理科大学講師

柴垣和三雄殿

早稲田大学教授

扇谷 尚殿

津田塾大学教授

東寿太郎殿

東京都立大学名誉教授

五唐勝殿

昭和61年度一般会計収支計算書 (61.4.1~62.3.31)

1. 収支計算の部

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
基本財産運用収入	266,118	人件費	132,714,091
会費収入	56,300,000	施設管理費	29,313,314
事業収入	164,655,866	その他管理費	19,824,296
施設改修協力金収入	9,718,500	一般事業費	14,803,596
セミナー会費収入	3,012,360	普通セミナー事業費	28,452,956
補助金等収入	10,792,000	学生指導セミナー事業費	9,439,945
寄付金収入	480,935	国際セミナー事業費	3,284,074
雑収入	9,238,045	固定資産取得支出	12,095,800
特定預金取崩収入	4,541,000	特定預金支出	3,000,000
繰入金収入	7,048,019	繰入金支出	3,238,434
		20周年記念事業費	93,856
		予備	0
当期収入合計	266,052,843	当期支出合計	256,260,362
前期繰越収支差額	67,051,730	当期収支差額	9,792,481
収入合計	333,104,573	次期繰越収支差額	76,844,211

2. 正味財産増減計算の部

増加の部		減少の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
資産増加額	24,888,281	資産減少額	19,884,528
負債減少額	4,541,000	負債増加額	3,000,000
増加額合計	29,429,281	減少額合計	22,884,528
		当期正味財産増加額	6,544,753
		前期繰越正味財産額	665,852,983
		期末正味財産合計額	672,397,736

寄書贈

'86年6月  
'87年1月

大同生命国際文化基金

「業の畏」

「新しき村」6、11月号

「I・D・E」273、279

「ケルトン妖精物語」

「ハミルトン体制研究序説」

「地球時代の構想力」

「Asian Culture」39、「Laughing Together」

「現代詩研究」317

「現代詩研究所」

「現代詩研究所」

「世界女性史小事典」

「金融経済」218、219

「王様のねむり」

「エコ・テクノロジー」

「もう一つの学校」

「むかしでいえる」

「「死をめぐる諸問題」

「「池井ゼミ20年」

「現代哲学の戦略」

「「A Day in The Life of AMERICA」

「「無気力からの脱出」

「「数学的経験」

「「世界女性の『将来戦略』」

「「国際交流」42

「「犯罪の現代史」

「「国際教育交換協議会」

「「水口禮治」

「「柴垣和三雄」

# 千人会

昭和61年3月31日現在

現在会員一、五一九名

(通算入会者一、七八六名)

新しく会員となられた方々

2名(第87回報告(申込順))

青山学院大学教授 大谷 登志雄殿

津田塾大学助教授 村上 健殿

増沢利幸、笠耐、久保亮五、彦由一太、板橋並治、福永寿己夫、梅村魁、山田辰雄、岡山猛、木村建一、白井泰四郎、藤木宏幸、若林玄修、安藤英治、平野鉄太郎、勝見允行、村井美、中田良平、一松信、石原忠男、宇野重昭、最上武雄、永野賢、小泉仰、内山正熊、大西清、五唐勝、佐藤毅、白川和雄、井村君江、宮腰賢、渡辺武雄、井関昇、市川邦彦、柴田泰比古、富子勝久、熊田陽一郎、土井恵美子、麻島昭一、原一雄、室田武、大泉光郎、松尾弘、永井道雄、柘植敏治、岡村繪吾、人見宏、富塚太郎、山田良之助、太田淳一、森山ヨシ子、田所光子、山澤逸平、丸山眞男、寿里茂、小山五郎、大田末穂、向坊隆、大谷登士雄、高橋和之、吉沢四郎、進藤トク、鈴木友二、木田宏、福田基、河村フジ子、有賀弘、護雅夫、那須宗一、石堂常世、富岡幸雄、瀬野信子、斎藤幸一郎、池田義人、村田晴夫、梶原豊、手塚喬介、佐藤公孝、瀬部孝、萩原

## 会員の現況

(昭和61年3月31日現在)

入会者数(通算)	1,785人
(物故者・退会者)	258人
<b>実会員数</b>	<b>1,527人</b>
終身会員(一時払い10万円)	17人
A会員(年額 10,000円)	191人
B会員(年額 5,000円)	465人
C会員(年額 3,000円)	854人

稔、望月清司、村山松雄、加藤六美、内藤博、池原義郎、原豊、春田素夫、西野万里、藤井弥太郎、館逸雄、望月厚志、中村達也、松澤通生、石渡敏、林邦夫、碓井信一、伊藤意智郎、大槻盛一、小倉芳彦、井上百合子、小林文男、小原啓義、高瀬文志郎、横田忠夫、佐藤慶幸、籠信義、手島修蔵、山元洋、熊野敦子、中村妙子、染谷恭次郎、木村尚三郎、江淵浩美、安藤賢一、井村光世、樋口美智恵、高峯一愚、関根隆光、塩田庄兵衛、水谷眞智子、大河内正陽、海老根宏、堤彪、村田喜代治、鈴木達雄、矢野洋四郎、石弘光、久保田浩、豊田陽子、井上宇市、桐生富久、下森定、中島直忠、関口富左、加藤秀俊、小泉一郎、原治、絹川正吉、羽田三郎、伊倉退蔵、阿部弘、原芳男、清水昭次、佐藤経明、小原清成、前田愛、竹内昭夫、奥野忠一、水野弘文、野上繁、横山勝信、太田正孝、芳野越夫、堀野定雄、矢沢大二、梅沢文輔、加藤一郎、向山文雄、富山芳正、北野弘久、後藤捨男、大原栄一、近藤裕、寺内礼治郎、芳賀徹、金子六郎、中村英雄、平野健一郎、加藤晴久、吉田宏哲、近藤正夫、大村晴雄、関口忠、山之内靖、木原太郎、正田互、仁科雄一郎、天城勲、今井栄、鈴木佛二、福田隆、内田市五郎、久留都茂子、小林保彦、阿久津喜弘、崎田直次、高橋三雄、狩野昭昭、平野文彦、野見山不二、本明寛、伊藤喜栄、峰岸純夫、岡田巳代次、大塚久雄、下出積興、嶋澤巖、佐藤和男、小野文寛、角田稔、大野泰雄、福島明、佐伯彰一、宗像元介、椿弘次、犬塚博、干野熊男、福山直美、尾田綾子、徳末愛子、竹内喜代司、鈴木二郎、山本幹夫、柴田勇造、村瀬寛、西川大二郎、木村健二郎、石川孝夫、徳永勇雄、川名明、柴垣和三雄、澤島侑子、高橋忠次郎、岡田英和、朝野洋一、宮川彰、竹村猛、板倉讓治、渡利千波、小川政亮、今井義夫、奥山典生

### 千人会員からのたより

(敬称略)

時に懐しく思い出します。会報も立派になり感心していますよ。お元気に願います。

社会教育協会常務理事 岡山 猛

満六十五歳を迎え老人の仲間入りをしましたが、学問の上ではまだまだ現役です。

## 千人会収支計算書(昭和61年4月1日～昭和62年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
1. 会費収入	4,013,000	1. 印刷製本費	149,500
2. 雑収入	13,040	2. 通信運搬費	653,955
当期収入合計(A)	4,026,040	3. 払込手数料	41,420
前期繰越収支差額	3,417,705	4. 学生指導セミナー補助費	3,809,585
		5. 雑費	400
		当期支出合計(C)	4,654,860
		当期収支差額(A)-(C)	△ 628,820
		次期繰越収支差額	2,788,885
合計	7,443,745	合計	7,443,745

今年これまでの論文をまとめたもの、念願いたしております。今年よりA会員にさせていただきます。

東京芸芸大学名誉教授 永野賢

東洋大学教授 白井和雄

大学からの特別海外研究員としてドイツに一年間留学していただきましたので、昨年は失礼してしまいましたが、再開させて頂きます。

国立音楽大学助教授 佐藤公孝

お誕生日のお祝いありがとうございます。これからも正念場だと思います。一日一日を大切に生きていきたいと考えています。

日本女子大学教授 熊坂敦子

暫くご無沙汰して失礼いたしました。今年から又、納めます。少しでもお役に立ちますように。

樋口美智恵

## 寄付金報告

昭和61年3月5日

立命館大学を定年退職し、京都から東京の自宅に戻って生活することになりました。

東京都立大学名誉教授 塩田庄兵衛

数年来、大学入試の研究に専念しております。昨年は時事通信社から『世界の大学入試』を発売しました。

大学入試センター教授 中島直忠

三月末日で神奈川県立師範学校に就任以来、四年近く続いた教職を去りました。

横浜国立大学名誉教授 伊倉退蔵

大学セミナー・ハウスと聞けば、なぜか『緑』を思い出します。

栃木県労働金庫勤務 福田雄

本年はBにさせて頂きます。

東京大学名誉教授 大塚久雄

### 一般寄付金

六、〇〇〇円 慶応大学西川ゼミ殿

一〇、〇〇〇円 東京純心女子短期大学新入生オリエンテーションキャンパブ殿

一〇、〇〇〇円 阿佐ヶ谷美術専門学校インテリアゼミ殿

一〇、〇〇〇円 都民生協新入職員一同殿

梅一株 日米大学院会議参加者殿

あんず一株 青山学院大学大谷ゼミ殿

もっこく一株 市光工業(株)・PIA

はなみずき一株 A(株)新入社員一同殿

十文字学園女子短期大学家政専攻新入生交歓会殿

教育プログラム資金

一、一五三三円 第139回大学共同セミナー参加者殿

一、一五三三円 第139回大学共同セミナー参加者殿

一七、三八九円 第140回大学共同セミナー参加者殿

# 業／務／通／信

78年3・4・5月  
新緑の丘の合宿から

3月は春休みを利用しての合宿で賑わい（稼働率69%）、4・5両月は各大学のオリエンテーションが連日のように展開された（稼働率84%・78%）。4・5両月の宿泊利用者がそろって延べ六〇〇人を超えたのは初めてのことである。

## ●新入生合宿で八、五〇〇人

4・5月中に実施された大学関係の新入生合宿研修（いわゆるオリエンテーション）でクラス単位以上の規模のものは計五七件（二九校）。宿泊参加者数は七八九一人（うち教職員六五六人）、延べにすると八、五二六人（六八六八人）におよび、両月の総宿泊者数の六四%を占めた。また、前年度と比べても件数で一一、宿泊延人数で一、七四三人（二五%）という顕著な増が見られた。毎年の常連実施校に、今春は新たに埼玉大、大妻女大、都立科学技術大等の五学科が加わり、他に数校の「復活」があったためである。

なお、東京学芸大（六教室・学科）、武蔵工業大（電子通信）、そして6月実施の白梅学園短大（保育）の三グループがこの春の合宿で「20回目」を記録した。

わたしたちの合宿

手づくりの

フレッシュアップ・キャンプ

学習院大学  
学生相談所長  
鶴沢良宏

私達の学生相談所は、学習院大学その他サークルと何ら変わらない、学生の手によって運営されている活動である。その活動内容は他のサークルおよび学生に情報と場を提供することであり、具体的には大学のサークル案内、履修相談、音楽祭の企画、大学祭での案内所の運営等々である。例年「新歓」の時期には、活動の一環として新一年生を対象としたフレッシュアップ・キャンプを行っている。



恒例のカレライリス野外自炊（キャンプファイアール場）

## ●二つの自主運営「新歓」合宿

「新しい大学生活」へのよき方向づけ（オリエン）をを目指す新入生行事は、大学によって規模も内容も多様である。その運営・参加の状況も①教師主導②教師・上級生合同③上級生主導、に大別さ

のである。そしてその目的を達成させるべく、最適の場として私達は毎年大学セミナー・ハウスを選んでいる。

今年も4月中旬の週末に開催、新入生約三十名、教職員五名、昨年度の参加者五名、そして学生相談所員十六名の約六十名が参加した。班別話し合い、キャンプファイアール、そして恒例のカレライリス野外自炊など。今後の大学生活がより充実したものと期待され、そして恒例のキャンプを行うことができた。

今後も、私達はこのような私達自身による企画を年々続けていきたいと考えている。  
(経営学科3年)

## 入学前の交流

東京薬科大学  
新歓実行委員会委員長

田原栄俊

新入生が未知の社会である「大学」に足を踏み入れる時、期待とともに少なからぬ不安を抱く。そうした不安を入学前に少しでも取り除き、一日も早く「東薬」の水に馴染めるよう、毎年「新入生歓迎キャンプ」をセミナー・ハウスで行っており、今年で九回目になる。

このキャンプは、東薬の上級生よりなる新歓実行委員会が主催するいくつかの新入生歓迎行事の中で最大のものである。委員会は10月末に発足し、キャンプの企画、新入生のためのガイドブック『おまかせ』（本年度版は二九ページ）の編集等を進める。2月下旬には入学予定者に郵便で参加を呼びかけ、今年も4月2・4日の入学式前に開催し、新入生一四〇名、上級生一〇〇名で総勢二五〇名のキャンプとなった。



パネルディスカッション  
——先生をお招きして——（小セミナー室）

全体が八グループに分かれ、上級生の班長を先頭に班単位で行動するが、全員が講堂に集まったらレクイエーションなどもある。中には本学の先生をお呼びしてパネルディスカッションを行う。上級生や先生方も親しく交流する機会をもつことが、何よりも新入生の不安を取り、大学生活へのスムーズな導入を助ける。入学前に行うので、新入生は当然二泊三日のキャンプの初日に初めて顔を合わせるわけであるが、最終日には、一ヵ月前から知り合っていたと思えるくらい親しくなっている。実は、僕自身も二年前このキャンプに参加したのだが、そこで多くの先輩と知り合ったおかげで、入学式当日から気軽に話すことができ、そのことの上現在の友達関係もあるように思われる。

新入生がより充実した大学生活のスタートをきるために、このキャンプは今後も先輩から後輩へと年々受け継がれていくに違いない。  
(薬学部3年)

れる。②③での上級生の参加は、今春は三六グループ・延べ八二五人（昨年度六八〇人）を数えた。

さて、③は上級生の自主的な企画・運営によるもので、ここでは教職員はあくまで協力者としての参加となる。右掲「わ

たしたちの合宿」で紹介する東京薬科大学と学習院大学学生相談所の二つのフレッシュアップ・キャンプがそれで、前者は九年目、後者は五年目の常連。ともに生活交流の中で大学生活への導入を助けようとするものだが、運営に当たる上級生

の献身的な働きぶり、それに応える新入生の能動的・積極的な参加の姿が、いつも極めて印象的なのである。

### ●外国人留學生の新入生合宿

外国人留學生のオリエンテーションを目的とする合宿が二つ、4月中に行われた。中央、慶応両大学の国際（交流）センターの主催によるもので、ともに日本人学生・教職員との交流の中でのガイダンス。前者には五カ国、後者には八カ国の留學生が参加しているが、以下は後日寄せられた感想の一部である。

▼一年生になって寂しい思いをしていた。しかし大学セミナー・ハウスでの合宿の後、そのような気持は「天の遙かな彼方へ」行ってしまった。留學生と日本の学生、先輩と後輩が、もう何十年間つき合っている旧友のように言葉をお互いに交わしている。そのような中で、私は家に帰って兄弟姉妹と一緒にいる感じがした（中国・朱菁）。

### ●初の日米大学院会議

3月「春分の日」の前日、この丘にしつとりと落ち着いた国際交流風景が見られた。東大「比較文学比較文化研究室」恒例の春合宿に、アジア諸国や欧米各国七カ国からの研究生らの参加があり、そこに、第一回「日米大学院生による日本美術史研究会議」で日米両国30校からの

若手研究者ら約四〇名が到着したからである。

後者は国際セミナー館に四泊して、各自の研究発表やシンポジウムを行い、連日深夜まで熱のこもった討議を展開した。「古墳から現代美術に至る様々な分野の日本美術」を研究する両国の院生らは、合宿生活の中ですっかりうちとけ、会議の合間には遠来荘での茶会なども楽しんだ。この「初の試み」の最大の収穫は「ともすれば各大学において孤独な環境で研究を強いられている大学院生たちが、お互いの研究の方法論を認識することによって、今後の自らの研究の指標を確認することができたこと」（幹事の山下裕二・東大助手）という。ハウスにとっても初の大学院生の国際会議で、これは



日米大学院生による日本美術史研究会議の参加者たち（国際セミナー館入口）

日本側ホスト校・東大の辻惟雄、高階秀爾両教授がハウスとのご縁故に「誘致」

## 森の番人たち

### 夏の大学セミナー・

#### ハウスの野鳥七撰

日本鳥類保護連盟 中尾光夫

野鳥は夜明けとともに起き、さえずる。大学セミナー・ハウスの朝も野鳥のこえに起こされることも多いことだろう。

野鳥は森の番人であり、森の健康状態のパロメーターであるといわれている。それは野鳥が森の構成メンバーとして欠かせない存在であり、植物や昆虫と相互に依存し合って生活しているからだ。森には、めずらしい野鳥がいるだけではなく、普通の鳥が普通にいることが大切なことだ。

大都市近郊の貴重な森にある大学セミナー・ハウスの野鳥を観察して、自然のしくみの複雑さや巧妙さを、はだで感じてみませんか。

ハウスのシンボルマークである七枚の葉にちなんで、夏の森で見ることのできる野鳥七種を選んでみました。

#### シジュウカラ

ツツピー、ツツピーと鳴き、ときどきジュッ、ジュリを入れる。繁殖期にはなわばりをつくり、つがいで行動するが、その後は群れをつくって、森を移動する。枝先に逆さにならさがるなどの動作が面白い。

されたものである。今回は米国で開催される。

#### コゲラ

キツツキの仲間、日本では最も小さい。ギイー、ギイーと鳴き、波形に飛ぶ。木の幹に縦にとまるが、小枝やつるにもよくとまる。最近、都心の公園でも繁殖して話題になっている。

#### キジバト

デデッポッポと低い音で鳴き、ヤマバトともよばれる。木の枝に小枝を組み合わせて雑な巣をつくる。全身灰褐色だが、よく見ると茶や青の模様が美しい。つがいで行動していることが多い。

ウグイス  
ササなどの多い藪で繁殖する。地味な色と低い枝を活発に動くため姿はなかなかみられない。ホーホケキョとさえずるが、繁殖期にはケケケキョケキョケキョ……とも鳴く。昆虫を主食とする。

ムクドリ  
農耕地や市街地で繁殖し、つがいで行動している。地上を歩いて餌をあさるが、木の実は好んで食べる。ひなが巣立つと群れをつくりはじめ、秋には何万羽という数になつて、うるさく鳴き合う。

ツバメ  
夏鳥として渡来し、人家の軒下などに巣をつくり、益鳥として保護されてきた。スマートな鮮やかな飛翔で、空中の虫をとっていたり、電線に止まってジュリ、ジュリと鳴いているのがみられる。

ヒヨドリ  
ピーヨ、ピーヨと大きなこえで鳴く。体全体が暗灰色で、細かい斑点がある。近年、都会でも繁殖し、一年中みられるようになった。尾が長く、波形をえがいて飛ぶ。あまり地上には下りず、木の実などを好む。

#### オナガ

グエーイ、グエーイと鳴き、浅い波形をえがいてゆつくりと飛ぶ。名のとおり尾が長く、頭上は黒、翼や尾はうすい青で、中央尾羽の先は白い。繁殖期以外は群れをつくって行動する。

# 利用状況

● 3月(115グループ、延五、七、五八人)  
\* 11月2日利用  
\* 11月3日利用  
日帰りを除く

- 東京学芸大学助教授 堅田 明義
- 東京学芸大学助教授 鈴木 仁
- 早稲田大学助教授 狩野 恂
- 東京理科大学助教授 狩野 紀昭
- 東京理科大学助教授 川端 潔
- お茶の水女子大学文化会 栗原 尚子
- 武蔵大学助教授 黒坂 佳央
- 東京都立大学助教授 宮川 彰
- 中央大学法友会研究会 安念 潤司
- 成蹊大学助教授 成蹊大学文化会リターンズマン
- 東京経済大学文化会リターンズマン
- 明治大学助教授 徳永 豊
- 東京学芸大学助教授 小町谷照彦
- 東京工業大学高原・中野研究室(シテム・マネジメント講座)
- 慶応義塾大学助教授 岩田 末廣
- 中央大学助教授 木島 淑孝
- 横浜国立大学助教授 西園 芳信
- 慶応義塾大学助教授 西園 芳信
- セミナー
- 慶応義塾大学講師 松本 智
- 成蹊大学文化会
- リターンズ・キャン
- 国際基督教大学助教授 三宅 彰
- 東京大学助教授 伊藤 誠
- 明星大学どうんこの会
- 武蔵工業大学助教授 堺 孝夫
- 上智大学シエイクスピアブダクシオン
- 東京電機大学電子技術研究部
- 東京都立大学助教授 黒崎 勲
- 早稲田大学理工学部英語会
- 千葉商科大学助教授 影山 信一
- 中央大学講師 薄井 和夫
- 東京大学国際問題研究会
- 東京学芸大学助教授 堀口 秀嗣

- 東京大学社会思想研究会 長谷部勇一
- 横浜国立大学助教授 示村悦二郎
- 早稲田大学英語会
- 東京大学言語研究会
- 早稲田大学社会学福祉研究会
- 早稲田大学助教授 大村 雅彦
- 中央大学助教授 学芸大学シエイクスピア劇研究会
- 東京大学比較文学・比較文化研究会
- 日本大学助教授 佐々波清夫
- 中央大学助教授 長内 了
- 東京大学助教授\* 見田 宗介
- 青山学院大学助教授 大谷登士雄
- 淑徳大学助教授 田中一彦
- お茶の水女子大学助教授 六本 佳平
- 中央大学助教授 森田 明
- 中央大学助教授 石川 鉄郎
- 東京経済大学新入生歓迎実行委員会
- 東京理科大学II部物理研究部
- 駒沢大学助教授 古庄 正
- 千葉大学講師 佐藤 宗子
- 慶応義塾大学助教授 山田 大門
- 慶応義塾大学助教授 細野 公男
- 中央大学講師 吉田 宣之
- 明治経済大学助教授 竹前 栄治
- 昭和大学医動物教室 松島 淨
- 都留文科大学講師 山口 和孝
- 昭和大助教授 平林 勝政
- 国学院大学助教授 望月 清司
- 専修大学助教授 望月 清司
- 専修大学助教授 望月 清司
- 独協大学助教授 望月 清司
- 中央大学助教授 望月 清司
- 第139回大学共同セミナー
- 現象学の社会学研究会
- フランス語教育振興協会
- 日米大学院会議(日本美術史)
- 大学院仏語セミナー
- 数理社会学会
- ナチュラリスト環境教育センター
- 原町キリスト教会
- 聖書キリスト教会
- 東京松本英語専門学校
- PIEIE国際教育交流協会
- 東京都高等学校教職員組合
- 文学教育研究者集団

- 千葉大学OB交友会
- 日本アドラー心理学会
- 東京多摩のちの電話
- 中央スバル自動車\*
- アイワワールド\*\*
- 多摩中央信用金庫\*
- ソフトラウエアマネジメント
- 日電物流センター
- 東芝総合研究所\*
- 酒井薬品
- NBCコンサルタントセミナー
- 生活協同組合都民生協
- 日本生産性本部
- サカモト・ブリテンディング
- ブルームグラス
- システム・インテグレート
- 東成エレクトロロビーム
- ダスキンYD研究会
- 銀座山形屋
- ヒノキ新薬
- スーパリアルプス
- 山崎製パン
- 中野製電
- 中野輸送
- 昭和飛行機工業
- (個人利用)
- 日本リフト
- 金井ハツエ
- 飯田 文雄
- 西川 俊作
- 田村 皖司
- 羽田 三郎
- 中澤 進一
- 原 デス
- 小林 保彦
- 西野 万里
- 武蔵 武彦
- 中村 達也
- 五井 一雄
- 森住 衛
- 山田 有策
- 平澤 茂一

- 明治大学助教授 池田 一新
- 中央大学助教授 木島 淑孝
- 青山学院大学助教授 深沢 実
- 成蹊大学助教授 宇野 重昭
- 駒沢大学助教授 杉浦 智昭
- 中央大学助教授 井上 良二
- 明治大学助教授 中村 幸安
- 明治大学助教授 吉田 靖彦
- 青山学院大学助教授 高柳 先男
- 中央大学助教授 吉田 靖彦
- 大妻女子大学助教授 J・K・ブダ
- 杏林大学医学部新入生宿泊セミナー
- 早稲田大学講師 深沢 実
- 中央大学国際交流センター新入留学生オリエンテーション
- 法政大学助教授 伊藤 玄三
- 立教大学観光学科新入生オリエンテーション
- 杏林大学保健学部フレッシュマンセミナー
- 秋山 智久
- 明治学院大学助教授 秋山 智久
- 駒沢大学仏教学部新入生オリエンテーション
- 慶応義塾大学助教授 笠井 昭次
- 日本女子大学家政経済学新入生オリエンテーション
- 学芸大学学生相談所フレッシュマンキャン
- 東京都立商科短期大学経営学科第二部新入生歓迎オリエンテーション
- 明治大学助教授 森 久
- 産業能率短期大学能率科第二部オリエンテーション
- 東京都立医療技術短期大学新入生オリエンテーション
- 一橋大学助教授 榎原 清則
- 中央大学哲学科教育学専攻新入生オリエンテーション
- 工学院大学助教授 赤松 泰輔
- 工学院大学助教授 須田精二郎
- 東京学芸大学幼稚園教育科新入生オリエンテーション
- 東京都立大学機械工学科新入生ガイダンス
- 大妻女子大学児童学新入生オリエンテーション
- 東京農工大学農学工学科新入生オリエンテーション

- エンターテイン
- 日本女子大学社会学科新入生オリエンテーション
- 慶応義塾大学国際センター留学生オリエンテーション
- 中央大学心理学専攻新入生オリエンテーション
- 駒沢大学助教授 大久保治男
- 中央大学助教授 南原 一博
- 立教大学助教授 中江 幸雄
- 電気通信大学ユネスコ研究会
- 東京農工大学助教授 秋山 三郎
- 明治大学助教授 播 里枝
- 独協大学講師 竹田いさみ
- 相模女子大学助教授 巻 正平
- 東京国際大学助教授 M・A・シンプ
- 武蔵野音楽大学ES同好会
- 共栄学園短期大学生活学一年次合宿オリエンテーション
- 共栄学園短期大学英語学一年次合宿オリエンテーション
- 東京コンピュータ専門新入生オリエンテーション
- 東京純心女子短期大学新入生オリエンテーション
- 国際交流サービス協会
- 足利工業大学附属高校野球部
- 全国学生ME研究会
- 八王子歴史教育者協議会
- セント・ベル幼稚園
- 賀川豊彦記念松沢資料館
- 国立西埼玉中央病院附属看護学校
- わかさの家庭運営委員会
- 国際交流サービス協会
- 光印刷
- 酒井薬品
- 能美防災工業
- 多摩スポーツセンター
- 小西六写真工業
- 多摩中央信用金庫
- ホンカワミクロン
- 日本分光工業
- 東芝計装エンジニアリング
- アスター精機

# 予 告

## ●第14回国際学生セミナー

主題 〈開かれた〉日本・総点検  
——君は“Japan Problem”をどう  
考えるか——

期日 1987年11月6日～8日(金～日)

### ◇ゲスト講演

ジャーナリスト Karel・V・WOLFEREN 氏

### ◇セクション演習

A. 日本企業の海外進出  
丸紅国際経済研究室長 井上宗迪氏  
韓国西江大学教授

KIM Kwang Doo 氏

B. 日本市場の閉鎖性—コメをめぐる—  
千葉大学法経学部教授 唯是康彦氏  
東京工業大学工学部助教授 草野 厚氏

C. 外国人雇用と日本の労働市場  
京都大学経済研究所教授 小池和男氏  
神戸製鋼所派遣人事室長 山野上素充氏

D. 軍国主義復活の兆しはあるか—日本防  
衛政策の諸問題—  
青山学院大学国際政治経済学部教授

阪中友久氏

国際大学大学院国際関係学研究科準教授

John・B・WELFIELD 氏

### 〈運営委員〉

東京大学教養学部教授 渡辺昭夫氏  
一橋大学経済学部教授 山沢逸平氏  
他4名

## ●第141回大学共同セミナー

主題 言語・民族・国家——多言語・多民族  
国家の諸問題を考える——

期日 1987年11月13日～15日(金～日)

### 〈指導教授陣〉

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化  
研究所教授 飯島 茂氏  
放送大学教養学部教授 阿部 斉氏  
日本大学国際関係学部助教授 青木一能氏  
中部大学国際関係学部助教授 田中恭子氏  
東京外国語大学外国語学部教授小浪 充氏  
(運営委員)

問い合わせ先=企画室☎0426-76-8532(直通)

生活協同組合都民生協  
読売メディアアセンダー  
グリーンハウス  
日電アールバ  
全国青色申告会総連合  
■5月(89グループ、延六、四九〇人)  
武蔵工業大学電子通信工学科新入生  
歓迎セミナー  
日本大学芸術学部朗読研究会  
中央大学経済学会  
立教大学助教授 正田 康行  
日本大学農獣医学部放送研究会  
東京学芸大学近代史研  
法政大学英米文学研究会  
青山学院大学校友会  
学習院大学教授 齊藤 孝  
学習院大学シニエイクスピア劇研究会  
日本大学教授 北野 弘久  
芝浦工業大学電子計算機研究会  
帝京大学ESS  
津田塾大学国際関係学科フレッシユ  
マン・キャンブ  
津田塾大学英文学科フレッシユマ  
ン・キャンブ

東京学芸大学物理学教室新入生合宿  
研究  
東京学芸大学化学教室新入生合宿研  
修  
東京学芸大学理科教育教室新入生合  
宿研修  
東京理科大学教授 狩野 紀昭  
淑徳大学助教授 米川 茂信  
東京都立商科短期大学商学科第二部  
新入生歓迎セミナー  
東京電機大学電子工学科新入生研修  
東京都立商科短期大学商学科新入生  
歓迎セミナー  
東京都立立川短期大学家政・食物学  
科新入生歓迎セミナー  
文京女子短期大学英語英文学科新入  
生オリエンテーション\*  
千葉大学教授 藤井 良治  
東京都立科学技術大学機械システム  
工学科新入生学外研修  
芝浦工業大学教授 高橋 清  
東京学芸大学数学教育学科新入生合  
宿研修  
東京学芸大学生物化学教室新入生合宿  
研修

埼玉大学障害児学科新入生オリエン  
テーション  
駒沢大学講師 大塚 秀治  
中央大学教授 池田 正孝  
東京学芸大学4年22組  
埼玉大学機械工学科新入生合宿研修  
東京都立大学教授 馬場 宣良  
東京電機大学建設工学科・産業機械  
工学科新入生研修行事  
津田塾大学数学科フレッシユマン・  
キャンブ  
東京電機大学数理学科・情報科学科  
新入生研修行事  
東京電機大学経営工学科・応用電子  
工学科新入生研修行事  
東京都立大学化学科新入生オリエン  
テーション  
東京都立大学物理学科新入生オリエン  
テーション  
中央大学児童文学研究会イハト  
ンテーション  
中央大学教授 高窪 利一  
東京理科大学教授 富澤 稔  
早稲田大学教授 成田誠之助  
青山学院大学講師 富田 功

東京薬科大学薬学部新入生ガイダン  
ス\*  
成蹊大学教授 朝倉 孝吉  
中央大学助教授 関口 足一  
文教大学女子短期大学部英語英文科  
フレッシユマン・セミナー  
千葉大学教授 栗山 盛彦  
東京農工大学化学工学科新歓オリエン  
テーション  
東京都立大学数学科新入生オリエン  
テーション  
東京職業訓練短期大学校生産機械学  
科オリエンテーション  
専修大学助教授 麻島 昭一  
神奈川大学助教授 堀野 定雄  
桜美林大学短期大学体育文化団体連  
合会リターズ・キャンブ  
東京国際大学教授 佐久間 賢  
東京造形大学教員会議  
創価大学国際コース3ゼミ合同合宿  
阿佐ヶ谷美術専門学校  
職業訓練大学校建築科・木材加工科  
・福祉工学科新入生合宿セミナー  
社会政策理論研究会  
第140回大学共同セミナー

大気環境学研究室  
高橋聖書集  
所沢武蔵野教会  
エスベラントの家  
賀川豊彦記念松沢資料館  
中野輪送  
イセタン・データー・センター  
工業所有権研究会  
酒井薬品  
アイワールド  
東芝プロセスソフトウェア  
富士通テクノシステム  
多摩中央信用金庫  
西武百貨店八王子店\*  
日本建設産業職員労働組合協議会関  
東地方協議会  
(個人利用)  
中央大学教授 三橋 文明  
早稲田大学助教授 嘉納 成男  
独協大学教授 林 俊一

## ●編集後記

雑木林が、真夏の空の下に涼を運  
んでくれます。本夏の表紙には  
この雑木林の番人たちが登場しまし  
た。ハウスのキャンパスを自然観察  
のコースにしておられる愛好家の一  
人、中尾光夫さんが描いて下さった  
「夏の野鳥七撰」です。「森には、め  
ずらしい野鳥がいるだけでなく、普  
通の鳥が普通に飛んでいることが大切  
な」(本紙14頁より)を学びました。  
春から夏は、各大学がそれぞれの  
校風で演出される新入生合宿の競  
演の季節です。「わたしたちの合宿」  
(13頁)では、上級生の自主的な企  
画・運営の下に行われる二つの大学  
のオリエンテーションを紹介しま  
した。(能)